

「
う
そ
か
ら
の
」

【概要】

人はすぐ嘘をついて、本当に大切なことを忘れてしまう。

主人公・十村あつな（28）は、料理を食べるとそれを作った人の心が見えるという特殊な能力を持つ占い師兼探偵。

宮城県仙台市出身の矢沢ゆりの（29）は高校卒業後、女優を目指して上京。上京してすぐに東日本大地震で地元にいた家族を全員亡くした悲しい過去を持つ。

上京して10年の月日が経ち、ゆりのは女優として芽を出せずに東京で夜の仕事をしながら細々と生きていた。

ゆりのと同じく仙台市出身で、ゆりのとは家族ぐるみで仲が良かった前澤克彦（51）は、東日本大震災で愛する妻を失い、再起を試みた矢先に詐欺被害に遭って全てを失ってしまった。前澤は無一文で東京にやって来て、ホームレスなど厳しい生活を送る中で心が荒み、気付けば自らが陰しい表情で都会の闇に行く

詐欺師と化していた。

しかし前澤が詐欺を働くターゲットは限定されていいて、汚い手で金儲けをしている人間たちから金を騙し取ると、名乗ることなくそのお金を児童福祉施設などに寄付していた。そして同時に、詐欺被害に遭って途方に暮れる若者に住む場所を提供し生活を支えていた。

夜な夜なステージで妖艶に舞うゲイダンスの赤井権太（35）と、部屋に引きこもり毎日ゲームで殺し合いをしている小谷ふうか（23）は、それぞれ過去に詐欺被害に遭うが、前澤に助けられ生きていた。

ある日、あつなはひよんなことから街の交番に勤務する警察官の流木純平（32）と共に前澤の行方を探すことになる。

人が生きるために必要なのは、愛で繋がること。お互いの人生に寄り添い、嘘や間違いを繰り返しながらも愛を繋げていく物語。

【登場人物表】

十村 あつな（28） 探偵、占い師

流木 純平（32） 警察官

矢沢 ゆりの（29） 女優の卵

赤井 権太（35） ゲイダンサー

小谷 ふうか（23） 引きこもり

前澤 克彦（51） 詐欺師

○ワゴン車・後部座席

T・2021年6月

走行中の車の中。外は雨。

後部座席で空を眺めている矢沢ゆりの

(29)。周りには十村あつな(28)、

赤井権太(35)、小谷ふうか(23)、

前澤克彦(51)も乗っている。

ゆりの、空を眺めて。

ゆりの「人が生きるって何なんだろうね」

あつな、前を見たまま無言。

○同・運転席

流木純平(32)が運転している。

○ゆりののアパート・外観(夜)

T・2021年3月

2階建の古いアパート。

○同・部屋(夜)

ゆりの、電気をつけ入って来る。

無気力に座りスマホを耳に当てて。

機械音「2011年3月1日午後4時10分」

母の声「(仙台弁で)もしもし。元気に頑張っていますか？来週ゆりのの誕生日だからとびきり美味しいずんだ餅を送ります。忙しいだろうけど体には気をつけてね。こっちはみんな相変わらず元気です」

父の声「ゆりのいつでも帰って来いよ」

弟の声「姉ちゃんまだテレビ出ないのかよ」

母の声「(笑)みんな応援しているからね。じやあまた電話しまーす」

機械音「このメッセージをもう一度聞くには1を……」

ゆりの、繰り返し再生して。

母の声「(仙台弁で)もしもし。元気に頑張っていますか？来週ゆりのの誕生日……」

(回想始まり)

○宮城県仙台市・ゆりのの実家。

T・2011年3月

楽しそうに電話をしている母。
後ろでずんだ餅を作る笑顔の父と弟。

○東京・ゆりのの部屋

ゆりの、ずんだ餅を食べながら嬉しそ
うに留守電を聞いている。
傍らには宮城県の住所から届いた箱と
バスデーカード。

○宮城県仙台市・ゆりのの実家

大きく揺れ食器やずんだ餅や色んなも
のが落ちる。
慌てふためくゆりのの両親と弟。

○東京・ゆりのの部屋

電話が繋がらず落ち着かないゆりの。

○病院・霊安室

ゆりのの両親と弟らしい3体。
ゆりのが泣き叫び、泣き崩れる。

（回想終わり）

ゆりのの頬を涙がったう。

○俳優養成所・スタジオ（日替わり）

ゆりのと他数人のレッスン生が先生の前で一人ずつ芝居。ゆりのの番がきて。ゆりの、全て諦めたような寂しい笑顔。

ゆりの「なんで？　なんで何も言ってくれないの？　もう私の声は届かないの？」

ゆりの、立ち尽くす。

○クラブ（夜）

ステージで濃いメイクをした赤井が露出の多い衣装で妖艶にダンス。

○ふうかの部屋（夜）

暗い中でパソコンの画面だけが光っている。画面はゲームの戦闘シーン。無心にゲームをしているふうか。次々と敵を殺し、あっという間に勝利。ふ

うか、薄ら笑いを浮かべる。

○とある詐欺グループのアジト（夜）

窓のない薄暗い一室に設置されたパソコンや固定電話。数人の若者が電話で話している。

一番奥に座っていた坊主男、スマホを片手に飛び上がり関西弁で。

坊主男「なんやて！？なんでそないなことになっとるんじゃ！はよ金取り戻さんかいアホンダラア！」

坊主男、スマホを床に叩きつける。

○とある児童福祉施設の窓口（夜中）

黄色のマフラーをした男（前澤）、黄色の封筒をドアの前に置いて立ち去る。

○住宅街の駐車場（夜中）

ヘッドライトを照らしながら這いつくばって車の下などを覗き込むあつな。

あつな「（小声で）おーい。おーい」

通行人が不審な目であつなを見るが、あつなは気にせず。

制服姿の警察官・流木があつなの背後から声をかける。

流木「君、ここで何してるの？」

あつな、ヘッドライトがずれたまま、猫のおやつ用に持参していた煮干しをくわえたまま振り返る。

あつな「へ？」

○交番（夜中）

流木があつなの取り調べをしている。

流木「迷い猫の搜索？」

あつな「はい」

流木「煮干しを食べながら？」

あつな「お腹すいちゃって」

流木「職業は探偵」

あつな「はい。あと占いも少し」

流木、食いついて。

流木「占い？どんな？」

あつな「……料理占いとか」

流木、身を乗り出して。

流木「マジで？俺、占い好きの料理上手！」

あつな、目が点になって。

あつな「……ん？」

○とある児童福祉施設の窓口（朝）

ドアが開いて職員が一人出てくる。

職員、黄色の封筒に気づいて中身を見ると、札束が入っている。

職員、慌てて封筒を持って中に入る。

T・『うそからの』

○あつなの探偵事務所（日替わり）

T・2021年5月

キッチンで料理をしている流木。

応接スペースのテーブルでカード占いをしているあつな。

あつな「まだ？」

流木、料理を運んでくる。

流木「お待たせしました、流木特製パスタ！」

あつな、流木が言い終わる前に勢い良くテーブルに広げたカードや流木のスマホを払い退け料理を迎える。

あつな「いただきます」

あつな、モリモリ食べ始める。

あつな「うまっ」

流木、スマホを拾いながら。

流木「よかった。それでその、占いの方は」

あつな、無心に食べている。

流木「……」

テレビにはニュース番組が流れている。

ニュースキャスター「またイエローマフラー

が現れました。児童福祉施設の施設長は、

次のようにコメントしています」

画面には児童福祉施設が映し出され、黄色の封筒を抱きしめた施設長がマイクを向けられて。

施設長「以前からイエローマフラーさんの噂

は聞いておりましたし、これが許されることなのか私にはわかりません。ですが、恵まれない子供達を思い、こういった形で寄り添ってくださるイエローマフラーさんには感謝の気持ちでいっぱいです」

涙ぐむ施設長。

涙ぐむ流木。

あつな、食べ終わって。

あつな「それだ」

流木「え？」

あつな「あんた、なりたかったんでしょ。正

義のヒーロー」

流木「ええ！？なんで！なんでわかったの？」

あつな、空になった皿を差し出し。

あつな「食べるとわかるのよ。作った人のこと。ご馳走さまでした」

流木「マジかよ」

あつな「ってことで、捕まえるよ」

流木「誰を？」

あつな「イエローマフラー」

あつなと流木、テレビを見る。
ニュース番組が続いていて、スタジオ
ではイエローマフラーの特徴をまとめ
たボードが表示され、黒いスーツに黒
いサングラス、黄色のマフラーを首に
巻いた男のイラストが描かれている。

○路上に停まった車中

運転席に流木、助手席にあつな。

あつな、望遠鏡を覗いている。

あつなの望遠鏡が向けられた先にはキ

ャバクラ『ラク』。

流木「イエローマフラーこと前澤克彦が最後

に目撃されたのがこのキャバクラ『ラク』

で、店の女の子とトラブルを起こしていた

という目撃情報もあり」

あつな「トラブル？」

流木「それがよくわからないんだよ。これま

で前澤にキャバクラとか女とかいう浮い

た話はなかったのに」

あつな「このママ、私のお客なのよ。ラク
はママの飼っている猫の名前」

流木「じゃ早速いきますか」

あつなと流木、車を降りて『ラク』に
向かって歩き出す。

○キャバクラ『ラク』・ホール

煌びやかな店内。

ママと、開店準備をしている黒服。

あつなと流木、ママと向かい合って座
っている。

黒服、シャンパンが入ったグラスとピ
クルスを持って来てもてなす。

ママ「十村さんにはいつもお世話になってお
ります。何度もラクを見つけてくださって」

流木「そうなんですな」

あつな、ピクルスを食べ始める。
あつな「うま」

ママ「あらありがとう。たくさん召し上がっ
てね。お客様にも人気なの」

あつな、無心に食べる。

流木、あつなを横目に。

流木「このお店には以前から前澤が？」

ママ「前澤さんは最近のお客様です」

流木「店の女の子とトラブルなどは？」

ママ「それが：：新人の子とちよつと」

流木「詳しく聞かせてください」

ママ「ゆりのちゃんという新人の女の子がい

たんですけど、前澤さんはゆりのちゃんが

連れて来たお客様でした。でもちようど一

週間くらい前：：」

(回想スタート)

○キャバクラ『ラク』・ホール(夜)

T・一週間前

賑わっている店内。

奥の席にゆりのと前澤。

○キャバクラ『ラク』・待機席(夜)

ゆりのが来て端に座る。

少し離れたところで3人のキャバ嬢が
小声で話している。

キャバ嬢①「ねえ聞いた？<ホールム>」

キャバ嬢②「運ぶだけで3万円だって」

キャバ嬢③「えー、私もやりたい」

黒服が来て。

黒服「ゆりのさん、お願いします」

ゆりの「はい」

ゆりの立ち上がる。

○キャバクラ『ラク』・ホール（夜）

黒服、ゆりのを<ホールム>に案内。

柱の影からママがその様子を見ている。

（回想終わり）

○キャバクラ『ラク』・ホール

ママ、ため息をついて。

ママ「確か前澤さんはすぐにお帰りになって、

ゆりのちゃんはそのを追うように飛び出

したまま、今も音信不通で。あの二人は何

か悪いことをしていたのでしょうか？ゆりのちゃんのことか心配で」

ママ、シャンパンを一口飲む。

流木、ピクルスに手を伸ばすが、最後の1つをあつなが横から取って食べる。

あつな「ご馳走様でした。では」

あつな、立ち上がり歩き出す。

流木、慌ててあつなの後を追いながら振り返ってママに。

流木「ありがとうございます。また何かあればご協力お願いします」

ママ「……」

ママ、無言で見送る。

○路上に停まった車中

運転席に流木、助手席にあつな。

あつな「ママは嘘をついているわ」

流木「え」

あつな「怪しいのは前澤でも、そのゆりのつて子でもなく、ママよ」

流木「でもゆりのは店から消えたって」
あつな「そうだね。とにかくゆりのちゃんを
探そう」

あつなと流木、車から外を見渡し、『ラ
ク』の向かい側の建物に設置された防
犯カメラを見つける。

あつなと流木、顔を見合わせうなづく。

○俳優養成所・スタジオ（日替わり）

ゆりの、芝居をしている。

あつな、その様子をジャージ姿で端に
座って見学している。

○カフェ

あつなとゆりの、お茶をしている。

ゆりの「あつなちゃんはいつかからお芝居やっ
てるの？」

あつな「ああ。去年のクリスマスにあなた
の出演していた舞台を観て、お芝居ってい
なって」

ゆりの「え？」

あつな「だからあなたのお芝居に魅了されて」
ゆりの「えー！嬉しい！そんなこと言われた
の初めて」

あつな「ゆりのちゃんは？どうしてお芝居や
ってるの？」

ゆりの「…自分を忘れたいから」
あつな「コーヒーを一口飲む。」

あつな「どうして自分を忘れたいの？」

ゆりの「…コーヒーを飲みかけて止める。
ゆりの「……なんでだろう。忘れちゃった」

ゆりの、笑って見せる。

あつな「そうだ、今から飲みに行こうよ。も
っと話したいし」

ゆりの「ごめんなさい、これからバイトなの。
それに私、お酒弱くて」

あつな「じゃあ今度、お家遊びに行っていていい？
お家だったら酔っ払っても平気でしょ」

ゆりの「それだったら大歓迎！ご馳走作っ
ちやおうかな」

あつな「やったー、楽しみ！」

○シェアハウス・玄関（日替わり）

あつなを連れて来たゆりの。

赤井、あつなを舐め回すように見る。

あつな「……」

あつな、ちよつとゆりのの影に逃げる。

○シェアハウス・リビング

あつなが座っている。

テーブルを挟んで赤井、ふうかが座っ

ている。

あつなを凝視する赤井と、俯き加減で

前髪の隙間からあつなをチラ見するふ

うか。

あつな「……あ、あのお」

そこへゆりのがお茶を持って来て置き

ながら。

ゆりの「ここはシェアハウスで、ダンサーの
赤井権太さんと……プロの小谷ふうかち

やんです」

あつな「どうも十村です。……ん？プロって？」

赤井「ふうちゃんはプログラマーなの」

ゆりの「そうそう。プログラマー」

ふうか「……」

ゆりの「今日はあつなちゃんも来てくれたこ

とだし、頑張ってご馳走を作るよ！」

赤井「大丈夫なの？あんたずんだ餅しか作れ

ないじゃない」

ゆりの「ゴンちゃん手伝ってくれるでしょ？」

赤井「何それ私が大変なだけじゃないのよ」

ゆりの「そんなこと言わないで。ゴンちゃん

の料理めちゃうくちゃ美味しいから」

赤井「あらいつかからそんなお世辞言えるよう

になっちゃったのかしら？」

あつな「なんかごめんなさい」

ふうか、か細い声で。

ふうか「もういいですか？」

あつな「え？」

ふうか、消え入るような声で。

ふうか「部屋に戻ってもいいですか？」

あつな「あ、ごめんなさい時間いただきちゃ
って。あの、ふうかちゃんお料理は……」

ふうか、猛スピードで2階の部屋に走
って行く。

あつな、ゆりのと赤井に。

あつな「えっと彼女は……」

ゆりの「ふうちゃんは大丈夫。ちよっと初め
ての人が苦手なだけ」

あつな「へ、へえ」

赤井「あつなちゃんって彼氏いるの？」

あつな「え？」

赤井「彼氏よ彼氏。いないでしょう」

あつな「まあ今はいませんけど」

赤井「やっぱりね」

赤井、そのままキッチンに消えて行く。

あつな「何なの」

ゆりの「ね？みんなサバサバしてていい人た

ちでしょ」

あつな「そ、そうね」

ゆりの「みんな大変な人生だったから優しいんだ。私だけじゃない」

あつな「そうなんだ」

ゆりの、座って。

ゆりの「ゴンちゃんはね、実はゲイなの」

あつな「見りゃわかるけど」

ゆりの、気にせず。

ゆりの「ゴンちゃんはね、ゲイダンサーなん

だけど、日に日にメイクが濃くなっていく

病気なの」

ゆりの、スマホで撮った赤井のステ―

ジパフォーマンスをあつなに見せる。

あつな「へー。キレイ」

ゆりの「ゴンちゃんほどぎついメイクをする

ことで鎧をかぶって戦っているのよ。ここ

に来たのはね、知らない人に騙されて貯金

を全部取られたから。だからメイク道具は

ほとんど一〇〇均なの」

あつな「一〇〇均でこの仕上がり、逆に凄い」

ゆりの、あつなの話は聞かない。

ゆりの「ふうちゃんはね、ずっと自分の部屋
で人殺しのゲームばかりやってるの。何
年もかけていっぱい殺し続けているから、
すごい殺人鬼なの。でも本当はすごく優し
くて、ふうちゃんもお金をね……」

あつな「イエローマフラー？」

ゆりの「え……なんで……」

エプロン姿の赤井が来て。

赤井「ちよっとゆりのちゃん！いつまでも喋
ってないで手伝ってちょうだい」

ゆりの「はい！じゃああつなちゃんはここ
でくつろいで待っていてね」

あつな「うん」

ゆりの、赤井のあとを追ってキッチン
へ消えていく。

あつな、部屋を見渡す。

○シェアハウス・ダイニング（夜）

あつな、ゆりの、赤井、ふうかがテー
ブルを囲んでいる。

料理は鯛のカルパッチョやローストビーフ、有機野菜のサラダなど豪華。ふうか、自分の皿にとったサラダの中の人参を黙ってゆりのの皿に置き、代わりにゆりのの皿から鯛を自分の皿に取って食べている。ゆりの、ふうかの行動は気にせず、ワイングラスを片手に酔っ払って。ゆりの「ねえねえふうちゃん。何がダメ？どこがダメだと思う？」ふうか、目も合わさず無言で食べる。赤井、ピーマンをふうかの皿に入れ。赤井「ダメよふうちゃん好き嫌いばかり」ふうか、無言でそのピーマンをゆりのの皿に移動。ゆりの「ねえゴンちゃん、私ダメ？」赤井「そうねちよつと飲み過ぎね」ゆりの「私はこれまで、ただ一生懸命言われただけなの」赤井「そうね」

赤井、ふうかの嫌いな食材をふうかに食べさせようとする。

嫌がるふうか。

ゆりの「でもダメなことはダメだよ。ねえ

ゴンちゃん聞いてる？」

赤井「聞いているわよ。もう飲んじゃダメ」

赤井、ゆりののグラスを取り上げる。

○シェアハウス・ダイニング（夜）

奥のソファで酔い潰れているゆりのに毛布をかける赤井。

皿などを片付けているあつな。

ふうかはいない。

赤井、ずんだ餅を入れた紙袋を持って来て。

赤井「これ、ゆりのちゃんが作ったずんだ餅。

持って帰って食べて」

あつな「ありがとうございます」

赤井、座って。

赤井「私たちは弱いもの同士。助けられてこ

こにやって来たの。全部を背負って生きるのが辛くて、置き去りにして来たこともた
くさんあるわ」

あつな「もう取り戻せないんですか？」

赤井「さあね。あなたは？」

あつな「？」

赤井「私のお料理お口に合ったかしら？」

あつな「はい。美味しかったです。優しくて、

温かくて……ひとりぼっちの味」

赤井、ふっと吹き出して。

赤井「あなた面白いこと言うのね。ゆりのち

やんのずんだ餅はどんな味がするかしら」

あつな、紙袋の中のずんだ餅を見る。

○あつなの探偵事務所（日替わり）

あつなと、エプロン姿の流木、オムラ

イスを食べている。

あつな「うんまーい」

流木「今日のラッキーカラーは黄色だからオ

ムライス。完璧だな」

あつな「へー。で、何が納得できないの？」
流木「え？」

あつな「そんな味がするのよ。確かにあのシ
ェアハウスはどこかおかしいよね」

流木「ゆりのと赤井とふうか。3人は前澤に
騙された詐欺被害者なんだよね？」

あつな「うーん」

流木「でもお金がないようには見えなかった」

× × ×

（フラッシュバック）

○シェアハウス・リビング

あつな、部屋を見渡している。

大型テレビに最新の空気清浄機、加湿
器、革のソファーなど高価な家具。

× × ×

あつな「そうなんだよね」

あつなとエプロン姿の流木、オムライ
スを食べ終わっている。

流木、空いた皿を重ねキッチンへ。

あつな、勢いよく立ち上がり。

あつな「ゆりのちゃんのずんだ餅食べなきゃ」

流木、すでに皿に盛ったずんだ餅とお

茶を持っている。

流木「はいよ」

あつな「やるじゃん」

あつなと流木、座ってずんだ餅を前に

身構える。

流木「いただきます」

あつな「いただきます」

あつな、ずんだ餅を一口食べる。

○ 劇場・外観（日替わり）

劇場の前に『劇団・スマイルどっかゝ
ん単独公演』の看板。

あつなと流木、入っていく。

しばらくして、赤井とふうかも入る。

しばらくして、黒いスーツに黒いサン

グラスの前澤が入っていく。

○ 劇場・中

芝居をしているゆりの。

ゆりの「私は誰かと繋がっていたい。いつも、
いつまでも……」

× × ×

ステージに並ぶゆりのと出演者たち。

客席から拍手。

× × ×

客がどんどん帰っていく。

前澤が紛れて出ていく。

流木が追いかけてようとすが、あつな
がそれを止めて。

あつな「あんたが行くのはそっちじゃないよ」

流木「何？ どういうこと？」

あつな「ヒーローになるんでしょ」

あつな、流木の背中を押す。

(回想スタート)

○あつなの探偵事務所

キッチンで料理をしている流木。
応接スペースのテーブルでカード占いをしているあつな。

あつな「まだ？」

テーブルに流木のスマホ。

画面が光り、戦隊ヒーローの格好をした幼い男の子とその母親が映った待受画面に、メッセージが出る。

メッセージ「純平。たまには顔を見せに帰っておいで。ご飯作って待ってるよ」

流木、料理を運んでくる。

流木「お待たせしました、流木特製パスタ！」

× × ×

あつな、無心に食べている。

流木、スマホを見てポケットにしまう。

あつな、食べながら横目でそれを見て
いる。

流木、パスタを巻きながら。

流木「俺、出世するまで田舎には帰らない。

料理だって一人でできるし」

流木、パスタを頬張る。

あつな、無言でパスタを頬張る。

(回想終わり)

○劇場・裏口(夕方)

あつなが待っていると、ゆりのが出て
くる。

ゆりの「あつな！待ってくれてたの？」

あつな「うん。出待ち」

ゆりの「嬉しい！今日は本当にありがとう」

あつな「ゆりの。すごくよかった」

ゆりの「え、照れる」

あつな「ずんだ餅、食べたよ」

ゆりの「そう」

あつなとゆりの、肩を並べて歩き出す。

あつな「ゆりのはいい女優になると思う」
ゆりの「……あつな、初めてでしょ？ 私の舞
台観るの」

あつな、思わず立ち止まる。
ゆりの、振り返ってあつなを見る。

（回想スタート）

○カフェ

あつなとゆりの、お茶をしている。

ゆりの「あつなちゃんはいつかからお芝居やっ
てるの？」

あつな「ああ。去年のクリスマスにあなたの
出演していた舞台を観て、お芝居っていい
なって」

ゆりの「え？」

あつな「だからあなたのお芝居に魅了されて」
ゆりの「えー！嬉しい！そんなこと言われた
の初めて」

（回想終わり）

ゆりの「私、去年のクリスマス公演はインフルエンザで降板したから」

あつな「なんで」

ゆりの「こっちが知りたかったわよ。なんで

私に近づいたのか」

あつな「それは……」

(回想スタート)

○路上に停まった車中

運転席に流木、助手席にあつな。

あつなと流木、車から外を見渡し、『ラ

ク』の向かい側の建物に設置された防

犯カメラを見つける。

あつなと流木、顔を見合わせうなづく。

○交番

パソコンで防犯カメラの画像を見ているあつなと流木。

画面に、店を飛び出してくるゆりのが映っている。

よく見ると、ゆりのが着ているＴシャツの背中いっぱいに『劇団・スマイルどっかゝんクリスマス公演』という文字と変なサンタクロースのイラスト。

あつな「スマイルどっかゝんて」

流木「劇団員かな」

あつな「どっかゝんて」

流木「調べよう。劇団・スマイルどっかゝん」

流木、パソコンで劇団・スマイルどっかゝんを検索し、ホームページの劇団員リストの中にゆりを見つけ。

× × ×

○俳優養成所・スタジオ

あつな、ジャージ姿で端に座り、ゆりを見ている。

ゆりの、芝居をしている。

(回想終わり)

ゆりの「それで会いに来てくれたんだ」

あつな「私は……」

ゆりの「美味しかった？ ずんだ餅」

あつな「うん。悲しかった」

ゆりの、寂しそうに笑う。

あつな「もうすぐ全国指名手配になるよ、イ

エローマフラー。今日ニュースでやってた」

ゆりの「へー。そうなんだ」

あつな「あ！私、劇団Tシャツ買うの忘れて

た！買って来るから先行ってて！じゃ」

あつな、走り去る。

ゆりの、あつなの背中を見ながら。

ゆりの「……ありがとう」

ゆりの、悲しそうな表情。

○キャバクラ『ラク』・正面（夕方）

流木、手錠をかけたママと黒服をパト

カーに乗せると、スマホで電話をかけ。

流木「はい。薬物売買の場所に使っていたそ

うです。これから署に向かいます」

流木、通話を切って、母親にメッセージ

ジを送る。

メッセージ「今週末帰るよ。カレー食いたい」

流木、待受画面を見て微笑む。

○空港（朝）

キャリーケースを引いて歩く前澤、ゆりの、赤井、ふうか。

後ろからあつなが声をかける。

あつな「前澤克彦さん」

前澤たち4人、足を止め、振り返る。

前澤「はい」

ゆりの「あつな……お願い見逃して」

あつな「イエローマフラーさん、ですよね」

赤井とふうか、前澤を庇うように立つ。

ゆりの、一步あつなに近づいて。

ゆりの「あつな、私たち前澤さんがいないと

生きていけないの」

あつな「そんなことない」

ふうか「前澤さんは悪くない」

あつな「そんなことないんだよ」

赤井「前澤さんを連れて行かないで」

あつな「そんなことできない！」

ゆりの「なんで！？」

あつな「そんなこと前澤さんは望んでいないからよ」

前澤、ゆっくりとあつなの前に来て。

前澤「……あんた、猫を探していた人かい？」

あつな「お久しぶりです」

ゆりの、前澤とあつなを交互に見る。

(回想スタート)

○住宅街の駐車場(夜中)

ヘッドライトを照らしながら這いつく

ばって車の下などを覗き込むあつな。

あつな「(小声で)おーい。おーい」

背後から男(前澤)の声。

前澤「黒と白の猫かい？」

あつな、這いつくばったまま見上げて。

あつな「あ、はい」

前澤「それなら隣の駐車場で見かけたよ」

あつな「ありがとうございます」

前澤「早く家族の所へ帰れたらいいね」

前澤、飴をひとつ、あつなに渡して黄色の封筒を抱え、黄色のマフラ―をなびかせて立ち去る。
あつな、飴を握りしめ這いつくばったまま見送る。

(回想終わり)

あつな「あの時の飴、懐かしい、優しい味でした。誰かに会いたくなるような」

前澤、ポケットから飴と、一枚の写真を取り出す。
写真には、黄色のマフラ―をした妻と前澤が寄り添って微笑んでいる。

前澤「そうか」

ゆりの、赤井、ふうかの3人、前澤に寄り添う。

前澤N「誰のせいでもないんだよ」

(回想スタート)

○ 前澤の自宅

T・2011年3月11日

宮城県仙台市。

前澤と妻、お茶をしている。

テーブルにはずんだ餅が2つ。

突然大きく揺れ始める。

× × ×

前澤、妻と手を繋いで道を走っている。

妻は黄色のマフラーをしている。

妻が転ぶ。前澤が支える。再び走る。

× × ×

前澤、何もなくなった街で、黄色のマ

フラーを片手に泣き叫び、探し続ける。

× × ×

○ 事務所

T・2012年

前澤 N 「誰のせいでもない。災難は容赦無く降りかかってきやがる」

スーツ姿の男が笑顔で話している。

前澤、契約書にサイン。

スーツ姿の男、悪い顔でニヤつく。

○東京の繁華街（夜）

T・2015年

黄色いマフラ―をし、ホームレスになった前澤が道端で眠っている。

○東京の繁華街（夜）

T・2017年

黒いスーツに身を包み、サングラスを
している前澤。

スマホで話しながら、周りを睨み付け
ながら歩く。

前澤 N 「笑顔なんて忘れちゃっていたが……」

○東京の繁華街（日替わり）

T・2021年3月

ゆりのと前澤がすれ違い、お互いに立ち止まって振り返る。

ゆりの「克彦おじさん？」

前澤、サングラスを外して。

前澤「十村さん家の、ゆりのちゃんかい？」

駆け寄って来たゆりのの笑顔につられて、前澤もぎこちない笑顔。

○居酒屋（夜）

ゆりのと前澤、向かい合って座っている。テーブルには酒と料理。

ゆりの「克彦おじさん雰囲気変わったね」

前澤「……」

ゆりの、いたずらっぽく。

ゆりの「スーツなんて格好いいじゃん。東京に染まっちゃったんじゃない？」

前澤「……そうかもな」

ゆりの「冷たいよね。この街は」

前澤「ああ。芯から冷えるよ」

ゆりの「私ね、続けてるんだ女優。って言うってもまだ芽も出ていなくて夜はお決まりのキャバ嬢ってパターンだけど」

前澤「一人で踏ん張って来たんだな。偉いよ」
ゆりの「克彦おじさんに褒めてもらえるなんて懐かしい。嬉しいなあ」

ゆりの、力なく笑う。

前澤「ゆりのちゃん」

ゆりの「ん？」

前澤「一人で頑張るのも偉いが、困ったらいつでもおじさんに頼って来な。これでもおじさん、力を持ってるからな」

ゆりの「ありがとう。でも大丈夫。ちよっとおいしい副業ができるお店を紹介してもらったの」

前澤「そうか」

あつなと前澤、飲んだり食べたり。

(回想終わり)

○ 空港（朝）

ガラス越しに遠くで飛行機が飛び立つ。
あつな、ゆりのを見て。

あつな「私、イエローマフラーの本性を暴いてやろうと思ったの。悪いことしてるのにまるであしながおじさんみたいに報道されて。嘘の幸せはダメだよ……」

ゆりの「嘘じゃない」

ふうか「私は幸せだよ」

赤井「そうよ私だって十分幸せ。前澤さんは私たちの命の恩人だから」

あつな「恩人？あなたたちは彼が人から騙し取ったお金で暮らしているのよ」

ふうか「悪い奴らから取り戻してるだけだよ」

赤井「そうよ、私たちは被害者なの」

ゆりの「あつな、この人たちを責めないで」

あつな「なんで？騙されて傷ついたから？ゲイだから？引きこもりだったら悪い人か

らお金を騙し取っても許されるの？」

前澤、何か言おうとするが、ゆりのが

遮って。

ゆりの「そんな言い方しないで」

ふうか「綺麗事だよ」

あつな「え？」

ふうか「そりゃ立派な生き方じゃないし、自分がダメなこともわかってる。でも誰も助けてくれなかった。前澤さんだけが私を助けてくれて、あのシェアハウスでこの人たちと出会った。この人たちだけなの。この人たちが私の生きる世界の全てなの！」

取り乱すふうかを支える赤井。

赤井「あつなちゃん。あなたの言いたいこともわかるわ。でも人の生き方は1つじゃない。まっすぐに生きられない人間もいるの。前澤さんは、私たちの失敗した生き方を受け入れてくれた大事な人よ」

前澤、力なく首をあげ赤井たちを見る。

（回想スタート）

○クラブ（夜）

T・2019年

ステージでメイクをした赤井が露出の多い衣装で妖艶にダンス。
客席に来た赤井に声をかける坊主男。

○カフェ（日替わり）

赤井と坊主男が向かい合わせ。
テーブルには店舗の見取り図など。

赤井「私が……自分のお店？」

坊主男、関西弁で。

坊主男「そうや。これからは胸張って生きていけるで」

赤井、目をキラキラ輝かせる。

○コンビニ・中（夜中）（日替わり）

パーカーのフードを深くかぶったふうか、レジでコーラとマンガを購入し、出口付近に置いてある求人誌を手にとり出る。

○コンビニ・前（夜中）

ふうか、求人誌をコンビニ袋に突っ込んで歩き出す。

坊主男、ふうかに名刺を渡しながら。

坊主男「突然すみません。今、若い方で在宅でお仕事してくださる方を探してるんですけど、投資にご興味ありませんか？」
ふうか「と、投資？」

○ファミレス（夜中）

テーブルにはステーキやパフェなど。

坊主男、グラフが書かれた資料などを見せながら。

坊主男「普通の会社勤めの方には自由な時間がございませんやろ？ その分ご自宅でおられるあなたのような方なら、そらもうすぐにごツをつかんで億万長者ですわ」

ふうか、ステーキを頬張りながら前澤の話をも夢中で聞いている。

坊主男、契約書とペンを出しながら。

坊主男「同窓会ではあなたが主演！羨望の眼差しで見られること間違いなしや」

ふうか、高揚して息を飲む。

○ドラッグストア（日替わり）

みすばらしい身嗜みでスツピンの赤井、虚な目をして化粧品売り場へ。化粧品を手にとり、鏡に映る自分の顔を眺めながら、徐にポケットに化粧品を入れる。

○ドラッグストア・外

出てくる赤井に、店員が声をかける。

店員「お会計がお済みではない商品をお持ちですよ？」

赤井、ハツとしてうろたえる。

そこへ前澤が来て財布を出しながら。

前澤「すみませんこいつうっかり者で。おいからですか？」

赤井、訳も分からず前澤を見る。

○リサイクルショップ・窓口（日替わり）

大量のゲーム機や漫画などを箱に山盛りにして持つてくるふうか。

店員が戸惑いながら受け取っている。

店員「これ全部ですか？」

ふうか「はい」

ふうか、俯いたまま目も合わせず。

× × ×

店員「1万2千円ですね」

ふうか「え！？全部で？」

店員「はい」

ふうか「そんな……全然足りない」

× × ×

○交差点

車が行き交う。

手に1万2千円をそのまま握り、赤信号を見ずにトボトボと交差点に入っ

行こうとするふうか。
ふうかの腕を引っ張って助ける前澤。
1万2千円が空を舞う。
前澤、尻餅をついているふうかに目線
を合わせて。

前澤「大丈夫かい」

ふうか、顔面蒼白で震えている。

○シェアハウス・リビング（日替わり）

それぞれカバン1つを抱え、借りて来た猫のように座っている赤井とふうか。

前澤、サングラスをかけながら。

前澤「ここで好きに暮らしな。困った事がある

ればすぐ連絡を」

携帯の電話番号を書いたメモをテーブルに置いて出ていく前澤。

ふうか、震えてシクシクと泣く。

赤井、戸惑いながら。

赤井「だ、大丈夫よ？私ゲイだから！襲った
りしないから！ね？」

赤井、部屋を見渡し慌ててティッシュをふうかに渡す。
ふうか、ティッシュを受け取り、堰を切ったように声を上げて泣き始める。
赤井、慌てふためく。

○とある詐欺グループのアジト（夜）

関西弁の坊主男、スマホを片手に。

坊主男「またお前か！なんで邪魔するねん！
ふざけるな！」

前澤 N 「邪魔はお前だよ。いい加減諦めろ。

こっちも暇じゃねえんだよ。じゃあな」

坊主男「おい待て！俺の金返せ！ん？もしもし？
なんや切れとるやないか！アホンダ
ラアボケカス！」

関西弁の坊主男、スマホを床に叩きつける。

○東京の繁華街（夜）

黒いスーツ姿で、サングラスをしてい

る前澤。

スマホを切り陰しい表情で歩いていく。

（回想終わり）

○空港（朝）

赤井に支えられているふうか。

ふうか「嘘じゃない。本当に幸せだった」

赤井「そうね。そうよね」

ゆりの、あつなの元へ。

ゆりの「あつな……」

あつな、泣きそうに。

あつな「こんなのダメだよ。ダメなんだよ」

そこへ流木が駆けつける。

あつな、膝から崩れる。

流木、慌ててあつなに駆け寄る。

赤井とふうか、ゆりの、警察官の流木

を警戒する。

前澤が話し始める。

前澤「この子たちは悪くない。全て俺が一人でやったことだ」

ゆりの「克彦おじさん」

前澤「助けたつもりだったが、苦しめてしま
って申し訳ない」

ゆりの「そんなこと……」

前澤、流木に近づいて両手を出す。

流木、あつなを立ち上がらせて。

流木「僕たち、ゆりのさんの作ったずんだ餅
をいただきました。美味しかったです」

あつな「うん。美味しかった。でもすごく苦
しかった。もう終わりにしなきゃダメなん
だって、ゆりのが一番わかってたんだね」

ゆりの「……」

(回想スタート)

○キャバクラ・クラブルーム(夜)

ゆりの、白い粉を目の前に用意される。

ゆりの、黒服の指示でついた席のグラ
スに粉を入れようとするが、できずに
席を離れる。

○ 同 ・ 正 面 （ 夜 ）

私服で飛び出してくるゆりの、震える手でスマホを出し、電話をかける。ゆりの「お願い助けて！」

ゆりの、黒服が出て来たのを見て慌てて逃げる。

人混みでゆりを見失う黒服。向かい側の建物の防犯カメラが光る。

○ シ エ ア ハ ウ ス ・ 外 観 （ 日 替 わ り ）

ゆりの、前澤に連れられて来る。

○ 同 ・ キ ッ チ ン （ 夜 ） （ 日 替 わ り ）

皿やグラスを出すゆりのとふうか。料理を作っている赤井。

○ 同 ・ ダ イ ニ ン グ （ 夜 ）

テーブルの真ん中に誕生日ケーキ。それを囲むゆりの、赤井、ふうか、前澤。ゆりのがロウソクの火を消す。

（回想終わり）

○ 空港（朝）

あつなと流木。少し離れて、前澤を困むようにゆりの、ふうか、赤井。あつな「嘘から始まった生活でも、心を寄せ合って生きて来た時間は、少しずつ本物になっっていたんだね」ゆりのの頬を涙が伝う。

○ 同・駐車場

空はどんより曇っている。ワゴン車に乗り込むあつな、ゆりの、赤井、ふうか、前澤。流木、警察官の制服を脱ぎ運転席へ。

○ ワゴン車・後部座席

走行中の車の中。外は雨が降っている。あつなの隣にゆりの。ゆりのの向かい

側に前澤、ふうか、赤井。

ゆりの、前澤に優しく微笑みかける。

前澤、サングラスを外し、優しい表情

でゆりのに微笑み返す。

ゆりの、窓の外を眺めながら。

ゆりの「人が生きるって何なんだろうね」

あつな、しばらく無言だったが、前澤

や赤井、ふうか、ゆりのを順に見て。

あつな「愛で繋がることなんじゃないかな。

大切な人のこと、忘れちゃいけないと思う」

それぞれ、窓の外を眺める。

○道

一台のワゴン車が走っていく。

雨は上がり、空には虹が出ている。

○警察署・正面（早朝）

T・2022年1月

縄でぐるぐる巻きにされた坊主男が横たわっている。

それぞれ首に黄色、ピンク、赤、青の
マフラ―を巻いた前澤、ふうか、赤井、
ゆりのがわちやわちやと走り去る。

○あつなの探偵事務所（日替わり）

キッチンで料理をしている流木。

応接スペースのあつな。

あつな「まだあ？」

流木、料理を運んでくる。

流木「お待たせしました、お袋直伝カレーラ

イス！」

あつな「いったただきまーす！」

あつな、モリモリ食べ始める。

あつな「うまーっ」

テレビにはニュースが流れている。

ニュースキャスターが話している。

ニュースキャスター「今回、児童福祉施設に

届けられたのは、7色それぞれのランドセ

ルとマフラ―でした。施設長は次のように

コメントしています」

画面には児童福祉施設が映し出され、施設長がマイクを向けられて。

施設長「今回もレインボーマフラーさんからのたくさんのお愛が子供たちに届きました。本当にありがとうございます！」

画面の中にカラフルなランドセルとマフラーを手に喜んでいる子供たちの姿。流木、カレーライスを頬張りながら。

流木「いい話だなあ」

あつな「レインボーマフラーってちょっとダサくない？ネーミングセンス疑うわ」

流木「そんなこと言って嬉しくせに」

あつな「愛を感じる。このカレー愛の味だ」

流木「黙って食べ！」

電話が鳴って、あつなが受話器をとる。

あつな「もしもし。はいもちろんお任せください！どんな猫ちゃんですか？」

（終わり）